

【資料紹介】 デ・ラランデ邸（旧三島邸）の工事過程で 発見された資料について

早川典子*

目次

- 1 はじめに
- 2 情景再現展示について
- 3 発見された印刷写真・下絵
- 4 デ・ラランデ邸の画像資料まとめ
- 5 おわりに

キーワード ゲオルグ・デ・ラランデ ヤン・レツル 三島邸 廣田理太郎邸 移築

1 はじめに

1993年（平成5）3月28日に開園した江戸東京たてももの園は、2023年に開園30周年を迎えた。当初は武蔵野郷土館時代に移築された建物5棟に加えて、新たに30棟を移築する計画で、開園当初は35棟を目標としていた。しかし、途中で計画が修正され30棟をもってひとまず完成とした。その30棟目の建物として2013年4月に公開された「デ・ラランデ邸」は、現在、公開から10年を迎えた。

この建物は、もともとは新宿区信濃町駅近くに建っていた住宅である。移築前の所在地は、新宿区信濃町26-2となっている。総武線の車窓からも、その瀟洒な外観を見ることができた。建築史家藤森照信氏の著書『建築探偵の冒険 東京篇』（筑摩書房 1986年）の中で、「西洋館は国電3分 鏡子の家」として紹介されている¹⁾。当時の居住者は、乳酸飲料カルピスの生みの親と言われている三島海雲氏の妻、三島琴氏であった。

三島夫妻の死後、この住宅は、三島食品工業株式会社の事務所として使用され、緑豊かな敷地の中で、蜜蜂を飼育し、蜂蜜の製造・販売などが行われていた。

「三島邸」と呼ばれていたこの住宅は、『建築画報』1912年（明治45）7月号に写真入りで掲載され「ゲー、デ、ラランド氏邸 四谷区東信濃町 イングリッシュコテージ式にして。建築技手たる同氏の設計に係る。」と紹介されている²⁾。明治末期の雑誌に掲載された住宅が、震災、戦災を経て、現地で使い続けられている事例としてとても貴重であった。

*江戸東京たてももの園学芸員

東京都生活文化局（現在の生活文化スポーツ局）は、昭和63年度から数回にわたり江戸東京たてもの園に移築する建造物を選定するための悉皆調査「東京都江戸東京博物館野外展示施設収蔵候補建造物調査」を実施した。その調査において三島邸は、重要候補建造物として選定されていた。1998年、三島食品工業株式会社から、建物の寄贈についての連絡を受け、建物の現存状況について現地調査を行った。1998年（平成10）11月6日の「第21回東京都江戸東京博物館野外収蔵委員会」に付議され収蔵を決定。その後1999年（平成11）10月から翌年2月にかけて解体された。解体調査の中で、この住宅はもともと平屋建ての洋館があり、2階・3階を増築したものであることが判明した。

この建物は、建築専門雑誌の記述内容から、明治末期ごろに、新築されたと考えられていたが、解体調査の結果、基となる平屋建ての建物があり、それを改造・増築した建物であることがわかった。平屋建ての建物は、明治時代の気象学者・物理学者である北尾次郎が住んでいた木造平屋建て・瓦葺き・寄棟屋根・下見板張りの洋館であった。この洋館は、1910年（明治43）ころ、ドイツ人建築家ゲオルグ・デ・ラランデにより、木造3階建ての住宅として大規模に増築された。その際、北尾次郎居住時の1階部分も大改造されている³⁾。

2000年（平成12）3月14日の「第22回東京都江戸東京博物館野外収蔵委員会」においてこれらの成果を収蔵委員の先生方に報告した⁴⁾。

しかし、平成11年度（1999）をもって、江戸東京たてもの園の建造物復元事業は、休止されることとなり、この日の野外収蔵委員会では、本年をもって野外収蔵事業が休止となる旨、委員の先生方に説明して終了した。

本来であれば、建物の解体と復元は、連続して行われるべきものである。三島邸は、一般の方々に広く知られている建物であり、解体から復元をスムーズに行い、その過程で分かった調査結果を報告書として迅速に公開する必要があった。前述のとおり、解体調査の中で、この住宅はもともと平屋建ての洋館があり、2階・3階を増築したものであることが判明していたが、そのことについて広く公表する機会を逸してしまった。

江戸東京たてもの園の野外収蔵事業の休止から7年後の平成18年度（2006）、部材として保管している建物の現況を確認する作業を行い、ようやく三島邸の復元は平成20年度（2008）から、再開された。

2 情景再現展示について

建物を復元するための実施設計業務と並行して、建物内部での展示内容について広く検討を行った。三島邸と呼ばれていた建物であるが、三島海雲夫妻が居住していたのは戦後のことである。また三島食品工業が事務所として使っていたころには、養蜂業のほか写真スタジオとして貸し出すこともあったという。

江戸東京たてもの園では、居住者からの聞き取り調査を基に内部の展示を充実させるべく努めているが、デ・ラランデ一家が住んでいたと考えられる「明治末期から大正時代初期」の時期の居住者から、聞き取り調査を行うことは不可能であった。

幸いなことに、西洋美術史の研究者であるマイト美智子氏⁵⁾が1980年（昭和55）に、ゲオルグ・デ・ラランデの長女であるウルズラ氏から聞き取り調査を行っている。その成果を、ご提供いただけることになった。マイト美智子氏は、長女ウルズラ氏がもともと所蔵していた多くの写真をご本人の許可を得て、複写して管理していた。これらの写真の中で、デ・ラランデ居住時代の室内の様子が撮影された「食堂」と「居間」の写真があり、これらの写真を情景再現展示の参考とさせていただいた。（写真等資料については後述）

デ・ラランデ一家は、夫婦と娘4人、息子1人の7人家族であったが、家族以外に家庭教師の女性が描かれた以下のような絵画も確認されている。



【写真1】 亀岡崇「D家の人々」⁶⁾

3 発見された印刷写真・下絵

解体調査の過程で建物内から発見された「遺物」については、『江戸東京たてももの園 デ・ラランデ邸復元工事報告書』（2014年（平成26）で紹介している⁷⁾。

このうち、絵画に関するものを西洋美術史の研究者であるマイト美智子氏に確認を依頼した。本稿では、その一部を紹介する。

（1）デ・ラランデ邸 食堂 ブロークンペディメントから発見された印刷写真

食堂の入り口壁面にあるブロークンペディメント中央鏡板内部から、外国人女性の絵を撮影した印刷物が発見された。この鏡板裏側は木板を中央で2枚に分けて、釘で留められていた。

マイト美智子氏に見ていただいたところ、ケルンにあるヴァルラフ・リヒャルトツ美術館（Wallraf-Richartz-Museum）の収蔵作品に類似しているというご指摘をいただいた。その絵画とは以下のものである。



【写真2】 デ・ラランデ邸食堂ブローケンペディメント
(現在のようす)



【写真3】 発見された印刷写真

タイトル：ルイーゼ王妃 Königin Luise von Preußen

所蔵：ヴァルラフ・リヒャルトツ美術館

作者：グスタフ・カール・ルートヴィヒ・リヒター Gustav Karl Ludwig Richter (1823-1884)

製作年：1879年 キャンバスに油彩

大きさ：243.0×151.5 cm

作品に描かれたルイーゼ王妃とは、プロイセンのフリードリヒ・ウィリアム3世の王妃である。圧倒されるくらい大きな作品だという。この作品は1879年に美術館に寄贈されており、寄贈者はCarl Joest氏。

1879年に描かれたこの絵画を印刷したものが、当時どれくらい一般に流通していたものなのかを調べてみると、ドイツのミュンヘンにあるブランク美術出版社では、現在でもこの絵画を印刷したものをポスターや絵葉書として販売していることがわかり、マイト美智子氏は、この出版社のブランク氏に問い合わせたとのことである。その結果、「この印刷写真の原画は、この“ルイーゼ王妃”を撮影したもので間違いないと思われるが、顔や胸のあたりが少し押しつぶされているので、原画を下のほうから撮影したのではないか」という意見をいただいたとのことである。

筆者もeメールにてヴァルラフ・リヒャルトツ美術館に尋ね



【写真4】 絵葉書「ルイーゼ王妃」
(発行 ヴァルラフ・リヒャルトツ美術館)

高堂徳治「ゲー・デラランダ先生の思い出」より

「先生は子供の裸体彫刻が好きで、私にはニガテの毛筆で、よく原寸図を描かされた記憶もいまではなつかしい。」

原寸図を描かされた、という表現から、スケッチをデ・ラランダが描き、所員がそれを原寸図として作成したのではないかと想像され、事務所の所員の業務内容の一端がうかがえる文章である。

高堂徳治氏は、『建築画報』1912年（明治45）に蔵前工業高校の卒業生としてデ・ラランダ事務所に入所したという記事が掲載されている¹⁰。この記事によると、7月に入所してその年の末までという大変短い期間の在籍だったという。これによれば、デ・ラランダ邸の工事期間と考えられる時期よりも後の入所と思われる。



【写真6】石膏レリーフ下絵（南西面）



【写真7】石膏レリーフ下絵（北西面）



【写真8】石膏レリーフ下絵（南東面）



【写真9】石膏レリーフ下絵（北東面）

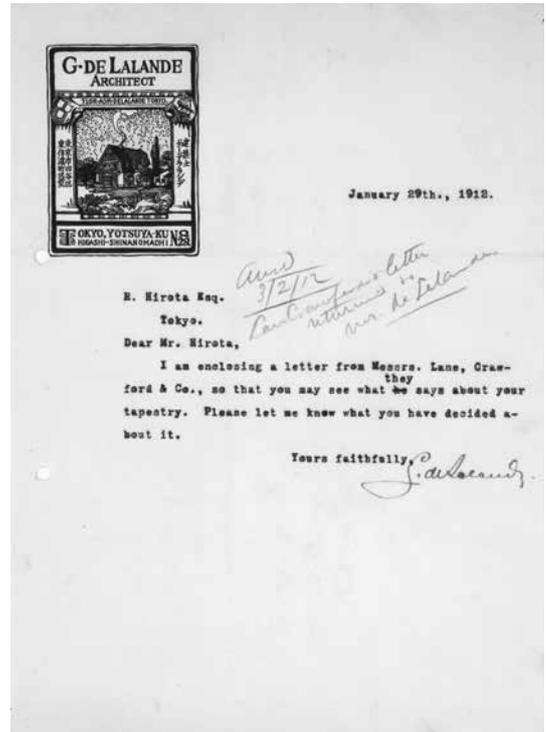
4 デ・ラランデ邸の画像資料まとめ

「廣田理太郎邸に関する資料の紹介」『東京都江戸東京博物館研究紀要第6号』の中で紹介した、デ・ラランデ邸が描かれたレターヘッド（資料番号：14240118・14240124他）が計10点確認されている。このレターヘッドが使われたのは1911年12月20日付の書簡が初出である。ここには、「東京市四谷区東信濃町貳拾九」「建築士 ゲーデラランデ」とはっきり描かれ、1912年7月3日付の書簡で最後となる。煙突から煙が出ている瀟洒なデ・ラランデ邸と、その隣に別棟のような平屋の建物が描かれており、事務所棟は別にあり、所員の業務はそこで行われていたのではないかと推定される。ヤン・レツルの書簡によると、独身のレツルの住まいとしては、デ・ラランデ邸は広く、建築事務所（設計のための事務室）を庭を横切ったところに建て、所員は3人であると書き残している¹¹⁾。

このレツルの手紙に記された、事務所棟に関する資料は、現在のところこのレターヘッドに描かれたこの絵のみである。

デ・ラランデ居住時期と考えられる歴史的な画像資料についてまとめると、マイト美智子氏が長女ウルズラ氏から借用した写真を含めて以下のとおりである。

- (1) 廣田理太郎邸資料の中のレターヘッド1911年 江戸東京博物館所蔵 【写真10】
- (2) 「ゲーデラランデー氏邸宅内食堂」『日清朝土木建築業者信用録』第1版1912年1月 江戸東京博物館所蔵 【写真5】
- (3) マイト美智子氏が長女ウルズラ氏から借用した写真（食堂、応接室、玄関テラス）3点 家族居住時と考えると1912年前後か 【写真11】 【写真12】 【写真13】
- (4) 亀岡崇「D家の人々」 公募展への出品は1915年であるが、家族居住時と考えると描かれているのは1912年前後か 【写真1】
- (5) 建築専門雑誌の記事 『建築画報』1912年7月号と『住宅』1916年9月号（発行年は異なるが同じ写真） 【写真14】



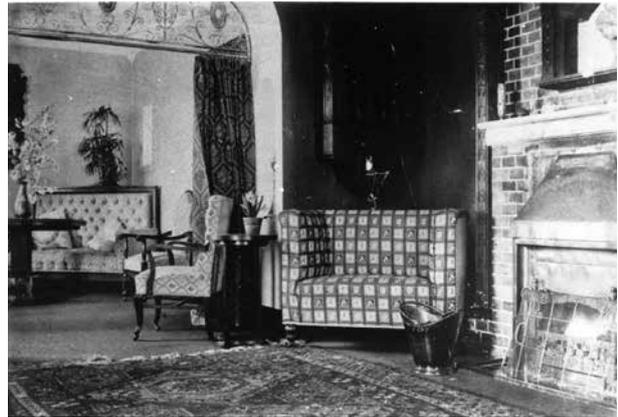
【写真10】 廣田理太郎邸関係資料デ・ラランデからの書簡（資料番号：14240161）

5 おわりに

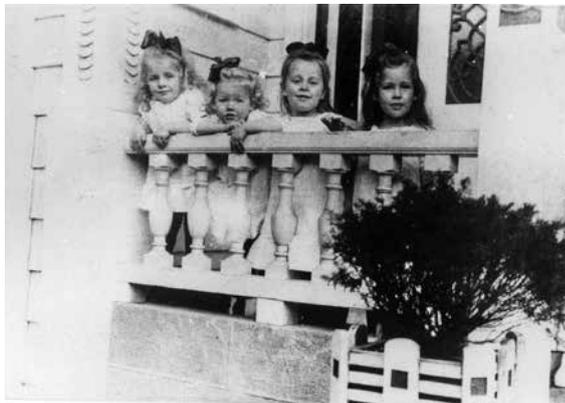
本稿は、『江戸東京たてもの園 デ・ランデ邸復元工事報告書』（平成26年7月）¹²⁾、「廣田理太郎邸に関する資料の紹介」『東京都江戸東京博物館研究紀要第6号』（平成28年3月）¹³⁾並びに「廣田理太郎邸資料の紹介」『東京都江戸東京博物館研究紀要第10号』（令和2年3月）¹⁴⁾に続くデ・ランデ邸調査に関係する資料の紹介である。今回は、江戸東京たてもの園にてデ・ランデ邸の公開が10周年を迎えたことをきっかけに、まとめを行った。引き続き調査を継続していく。



【写真11】 デ・ランデ邸食堂



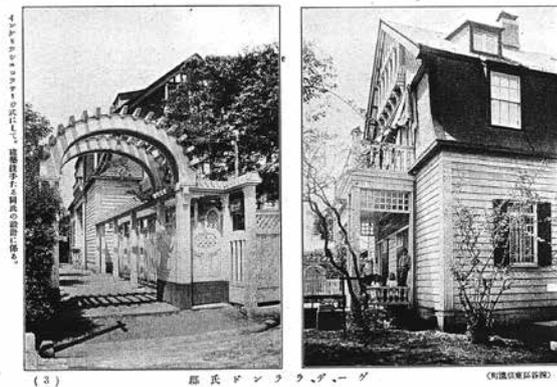
【写真12】 デ・ランデ邸応接室



【写真13】 デ・ランデ邸玄関テラス



【写真15】 デ・ランデ邸食堂古写真
(写真11) と同じアングルで
撮影した竣工時の写真



【写真14】 『建築画報』 1912年7月号

【註】

- 1) 藤森照信『建築探偵の冒険 東京篇』（筑摩書房 1986年）pp.229～252
- 2) 『建築画報』（1912年（明治45）7月号）p.3
- 3) 詳細は『江戸東京たてももの園 デ・ラランデ邸復元工事報告書』（2014年（平成26））を参照のこと。
- 4) 当時の野外収蔵委員は以下のとおり（肩書は全て当時のもの）。加藤有次（國學院大學教授）・段木一行（法政大学教授）・藤森照信（東京大学教授）・御厨貴（東京都立大学教授）・蓑茂寿太郎（東京農業大学講師）・森下慶子（株式会社ケーピー代表）・渡邊保忠（早稲田大学名誉教授）
- 5) マイト美智子氏は、上智大学外国語学部イスパニア語学科卒業後、ドイツに渡り、ケルン大学にて西洋美術史を専攻。学位論文「1542年以降、ヨーロッパ及び北アメリカ建築の日本への導入過程」にて博士号を取得。
- 6) 二科展第二回に出品された作品。（会期：1915年（大正4）年10月13日から26日まで 会場：日本橋三越呉服店旧館3階）
- 7) 『江戸東京たてももの園 デ・ラランデ邸復元工事報告書』（2014年（平成26））pp.144～145
- 8) 『日清朝土木建築業者信用録』（明治45年1月29日第1版）pp.19～20
- 9) 『建築研究』（雑草社・1957年（昭和32）6月）pp.8～10
- 10) 『建築画報』（1912年（明治45）8月号）p.26
- 11) 菊楽忍「書簡集から建築活動をたどる－建築家ヤン・レツルについて」『東京都江戸東京博物館研究紀要』第5号 p.70 デ・ラランデ事務所の隆盛ぶり1908年2月19日付 母への書簡画像より
- 12) 前掲注7）同書
- 13) 早川典子「廣田理太郎邸に関する資料の紹介」（『東京都江戸東京博物館研究紀要』第6号 2016年（平成28）3月所収）
- 14) 早川典子「廣田理太郎邸資料の紹介」（『東京都江戸東京博物館研究紀要』第10号（2021年（令和2）3月所収）

